

大宅壮一の対談に関する覚書 —『週刊文春』連載「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」を中心に—

A Note on Soichi Oya's Serial Articles on Talk : Focusing on
'Oya Soichi Jinbutsu Ryori Kyoushitsu' and 'Oya Taidan' in "Shukan Bunshun"

阪 本 博 志

「マスコミの帝王」と呼ばれた評論家・大宅壮一(1900-1970)は、1965年から亡くなる直前まで『週刊文春』誌上で対談を連載し、毎回各界の第一人者との対談をくりひろげた。今日では忘れ去られているといつてよいこの対談について筆者の作成した記録を示し、『週刊公論』『改造』などにおける大宅による他の連載対談の記録との比較から、その重要性をうきぼりにする。そしてこの対談の変容をさぐったうえで、考察を加える。

キーワード：大宅壮一、「大宅壮一人物料理教室」、「大宅対談」、文藝春秋、『週刊文春』、『週刊公論』、『改造』

目 次

I 「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」について

II 「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」の特色

III 「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」の内容

IV 「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」についての考察

付記

表1 『週刊文春』連載「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」一覧

表2 『週刊公論』連載「虚頭対談」一覧

表3 『改造』連載「愉しき毒舌」一覧

表4 『企業の新街道を行く』対談一覧

I 「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」について

「マスコミの帝王」と呼ばれた評論家・大宅壮一(1900-1970)の名がこんにち記憶の表層に浮かぶとき、それにともなって思い起こされるのは多くの場合、彼がつくったとされる「一億総白痴化」¹

「社用族」「青白きインテリ」「恐妻」「駅弁大学」といった造語の数々であろう。そのいっぽうで、彼が1960年代後半に、福田赳夫・奈良林祥・盛田昭夫・團伊玖磨・三島由紀夫・藤山愛一郎・市村清・岸信介・宮沢喜一・司馬遼太郎・三波春夫・菊田一夫・吉永小百合・水野成夫・秦野章・立川談志・遠藤周作・円谷英二・吉屋信子・江上波夫・五島昇・渋谷天外・謝国権・加瀬俊一・柴田錬三郎・塚本幸一・中内功・井深大・堤清二・斎藤茂太・宮本常一・金田一春彦・小松左京・内田吐夢・植草甚一・海音寺潮五郎・黒川紀章・野坂昭如・小沢昭一・加藤芳郎・加太こうじ・三鬼陽之助・江戸家猫八・梅棹忠夫・永六輔といった各界の錚々たる面々と対談をくりひろげていたことは忘れ去られていよう（以上は1966年から1969年までの対談相手。対談順）。

対談の舞台は『週刊文春』1965年1月4号から1970年11月30日号まで303回にわたって掲載された「大宅壮一人物物理教室」「大宅対談」である。大宅はこの間毎週誌面に登場し（ただし、1966年10月17日号のみ「大宅考察組レポート」が掲載）対談をくりひろげた。1970年10月23日におこなった大原健士郎を相手にした「大宅対談」（第303回目、11月30日号）の3日後、大宅は山中湖の別荘で狭心症の発作に倒れ東京女子医大病院に入院。この号の発売日11月18日には「大宅壮一氏重体」のニュースが流れた²。この号の対談の最後には「大宅壮一氏病気のため、次号よりしばらくの間休載します」と記されている³が、11月22日に大宅は心不全のため他界。『週刊文春』次号（12月7日号）では「天下の野次馬」大宅壮一の死 活字・ラジオ・テレビと昭和のマスコミ史を生きぬいた70年」が報じられた。

大宅の弟子・大隈秀夫は、「65歳を過ぎてからの大宅は体調をくずし、ほとんど文筆活動から遠ざかっていた。トークン・マシに徹しているふうがある」⁴としている。1900年生まれの大宅は、大隈も記すように1956年ごろ「最も脂が乗ってきたころ」を迎える⁵が、1963年から連載を始めた『炎は流れる』の執筆の過程で肥満体になり、それを解消するために行った「こんにゃく療法」で翌年栄養失調に陥った。そのためこの年連載を打ち切る。さらに1966年2月13日には期待をかけていた長男・歩が心不全で急死した。このふたつが大宅に心身ともの打撃をあたえた。

この1965年から亡くなる1970年までの時期に大宅が週刊誌に持っていた2大連載ともいえるものがある。ひとつは、『サンデー毎日』1965年10月17日号から1970年11月1日号まで連載された『サンデー時評』である。大隈は、「大宅が「サンデー時評」だけには身命を賭していたような気がし

てならない」とし⁶、大宅との会話のなかで聞いた「あの時評はおれの遺言みたいなものだからな」という大宅の言葉を紹介している⁷。そしてもうひとつが、小稿であつかう「大宅壮一人物物理教室」「大宅対談」である。大隈は「大宅は対談の名手で、巧みに相手を自分のペースへ引っ張り込む」とし、この対談を「代表作の一つ」としている⁸。この連載の重要性は、「対談の名手」という大宅の個性によるだけではない。人物論は、1933、34年に主宰した雑誌『人物評論』以来の大宅のテーマのひとつであることによる。

鶴見俊輔は1959年に、「大宅の仕事は、『日本の裏街道を行く』にしても、『昭和怪物伝』（1957年）にしても、大学教授の書く評論とか学問的エッセイをしのぐ実証性をもつもので、五十年たってからの学者たちは、昭和時代を研究するのに今日の学者の学問的評論でなく大宅のエッセイを利用するだろうと思う」と述べている⁹が、ジャンルを超えた当時の各界の第一人者が大宅という特異な個性と交わした言葉は、そのまま同時代の日本社会の貴重な記録となろう。

ここまで見た「大宅壮一人物物理教室」「大宅対談」の重要性にもかかわらず、『大宅壮一全集第15巻 人物物理教室』に収録されているものはそのごく一部であり、同書巻末の村島健一による解説は、この対談の全貌を述べたものではない。村島が解説に起用されたのは、小稿末尾の表1にあるように、「大宅壮一人物物理教室」の構成を担当していたからであろうが、それは第1回の1965年1月4日号から第102回の1966年12月26日号までである。

「大宅壮一人物物理教室」連載中に対談の一部が週刊文春編集部編『大宅壮一人物物理 スタミナ編』（太平出版、1967年）として刊行されているが、このあと続巻が刊行されることはなかった。なお『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 人名編』の「大宅壮一」の項において記されているのは、この対談の掲載期間のみである。

以上にかんがみ小稿は、「大宅壮一人物物理教室」「大宅対談」について紹介するとともにそれを踏まえた研究の展望を示す¹⁰。

⁶ 大隈、前掲書、466頁。

⁷ 大隈、前掲書、469頁。

⁸ 大隈、前掲書、370頁。

⁹ 鶴見俊輔「後期新人会員——林房雄・大宅壮一——」『鶴見俊輔著作集4 転向』筑摩書房、1991年、87頁（初出、1959年）。

¹⁰ 小稿は「覚書」という位置づけであることもあり、大宅に関する筆者のこれまでの研究については紹介していない。関心のある向きは、拙論「大宅壮一研究序説——戦間期と昭和30年代との連続性／非連続性——」『文学』2008年3・4月号をご覧ください。大宅について短く紹介したものとしては、拙稿「大衆娯楽雑誌『平凡』と評論家大宅壮一——ふたつの研究から見えてくるもの——」『大衆文化』創刊準備号、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、2008年、「この人・この3冊 大宅壮一」『毎日新聞』2009年4月5日朝刊9面を参照されたい。

II 「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」の特色

「くちコミュニケーション」すなわち「くちコミ」という言葉も大宅壮一の造語のひとつであるが、もともとこの言葉は現在用いられているような口頭で噂が広まっていくことを示すものではなかった。元来は、原稿用紙に文字を書く仕事ではなく、対談や座談会等、口頭でのコミュニケーションによる仕事を指すものであった。この言葉に象徴されるように、大宅は「くちコミ」よる多くの仕事を遺した。しかしながら、『大宅壮一全集第15巻』以外は、大宅の「くちコミ」の仕事は、『大宅壮一全集』に再録されておらず、『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 人名編』においてもその詳細は明らかにされていない。

ここではまず大宅によるいくつかの連載対談を概観し、それらとの比較から「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」の特色を示したい。

『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 人名編』で「大宅壮一」の項を開くと、ふたつの連載対談が記載されている。ひとつは「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」であり、もうひとつは『週刊公論』連載の「虚頭対談」である。『週刊公論』は中央公論社が1959年11月から1961年8月まで刊行していた週刊誌である。創刊前から中央公論社の当時の社長・嶋中鵬二にアドヴァイスをするなどしてかかわった大宅は、同誌の企画会議の中心となり、対談を主に受け持った¹¹。大宅の造語のひとつに「虚業」という言葉があり、これは「くちコミ」と同じく『広辞苑』に収録されている。この言葉と照らし合わせて考えても、「虚頭」という言葉は「巨頭」とかけあわせた大宅の造語であろう¹²。

「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」ならびに「虚頭対談」の概要は、本稿末尾の表1、表2のとおりである。このふたつを単純に比較しただけでも、連載期間（「虚頭対談」において、1960年2月16日号から同年6月14日号までの18回は、大宅は登場していない）は言うに及ばず、「虚頭対談」が大宅の海外旅行にともない終了し¹³次週から漫画家岡部冬彦の対談「何でも聞いてやろう」が始まっていること（第1回のゲストは松本清張）からも、「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」がなみなみならぬ体制で進められたものであることが容易に想像がっこう¹⁴。

大宅壮一の対談に関する覚書 —『週刊文春』連載「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」を中心に—（阪本博志）

次に、『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 人名編』の「大宅壮一」の項に登場しない対談をふたつ（うちひとつは正確には座談会）と比較してみたい。そのひとつは『改造』1953年4月号から1954年7月号に連載された「愉しき毒舌」であり、もうひとつは野村證券のPR報『第二の所得』に連載ののち単行本化された『企業の新街道を行く』（知性アイデアセンター出版部、1965年）¹⁵である¹⁶。前者については誌面をもとに、後者については同書をもとにその概要を示したものが末尾の表3、表4である。これらとの比較からも、「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」が期間の長さならびに登場する人物のヴァリエティーの豊かさからもきわだっていることがわかる¹⁷。

ところで『週刊文春』には、1964年7月6日号から1971年4月12日号まで松本清張『昭和史発掘』が連載されていた。「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」の連載期間は、『昭和史発掘』のそれと重なる。

粕谷一希は「1960年代、高度成長と新中間層の形成、マスコミの膨張のなかで、もっとも典型的な人物となったのは松本清張と大宅壮一であろう」「松本清張の存在と仕事が、純文学と大衆文学の間というよりも、文学とマスコミの間であるとすれば、大宅壮一の存在と仕事は戦後の論壇にあって、思想とマスコミの間にあったといえようか」と述べている¹⁸。また昭和30年代文化の研究で知られる藤井淑禎も、大宅と清張とを、昭和30年代を代表する二巨人として対比的にとらえている¹⁹。

『大宅壮一人物料理教室』『大宅対談』は大宅の晩年の2大連載のひとつであり、人物論は彼の活動を一貫するテーマのひとつである。また『昭和史発掘』は、清張のライフワークのひとつともいえる。

今日の週刊誌においては想像がつきにくいことかもしれないが、同時代を代表する二巨人のそれもふたりの仕事を代表するもののひとつといえる連載が、同じ週刊誌に同時に連載されていた。

『週刊文春』1970年の4月27日号から9月7日号まで「大宅対談」の担当を務めた、上野徹（現・株式会社文藝春秋代表取締役会長）に、こうした2大巨人を代表する作品が掲載されていた当時の『週刊文春』を現在から振り返ってどのように考えるのかについて、筆者は尋ねた。上野によると、菊池寛以来同社には、時局や歴史といった社会に結びついた流れと人物に対する興味の流れが継承されているという²⁰。ふたつの連載が掲載されていた『週刊文春』は、文藝春秋という会社のこ

¹¹ 1970年4月27日号から9月7日号まで「大宅対談」を担当した上野徹によると、編集長の小林米紀は、「週刊文春と大宅対談は一心同体、大宅さんが居る限り続ける」と、「大宅対談」の頁は大宅のためにあり大宅が亡くなるまでやらせてもらおうという趣旨のことを常々述べていたという（大隈、前掲書、362、363頁）。

¹² 桑原涼「雑誌の歴史学 人物編 最終回」『編集会議』2007年7月号、83頁では、「大宅がホスト役を務める連載対談「虚頭対談」は、タイトルからして大宅らしいもの」と記されている。

¹³ 『週刊公論』1961年5月22日号、94頁。

¹⁴ 大宅が他界したときに『週刊文春』の編集長であった小林米紀は、「週刊文春と大宅対談は一心同体、大宅さんが居る限り続ける」と、「大宅対談」の頁は大宅のためにあり大宅が亡くなるまでやらせてもらおうという趣旨のことをそれまで常々述べていたという（上野徹「大宅対談と私」『大宅文庫ニュース』第66号、2005年12月20日、1頁。上野、2009年8月19日）。

¹⁵ 連載時の対談については『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 人名編』の「大宅壮一」の項に記載がないが、『大宅壮一読本 大宅壮一全集別巻』の「大宅壮一著訳編書一覧」には同書が記載されている（231頁）。財団法人大宅壮一文庫ホームページの「大宅壮一著作リスト」にも同書の記載がある。念のため記しておきたい。

¹⁶ この企画については、小石原昭「やさしいところ」『知性1957-1997 企画集団知性コミュニケーションズの40年』企画集団知性コミュニケーションズ、1997年、250頁（初出1991年）を参照。

¹⁷ 小稿では『週刊娯楽よみうり』に創刊号（1955年11月4日号）から連載された「おしゃべり対談道中」の概要を扱っていない。これについては他日を期したい。

¹⁸ 粕谷一希『戦後思潮—知識人たちの肖像』藤原書店、2008年、256、258頁（初出1981年）。

¹⁹ 藤井淑禎、2007年9月11日、談話。

²⁰ 上野徹、2009年8月19日。

のふたつの流れが非常に象徴的なかたちでむすびついているものと考えられよう²¹。

それでは以下、「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」の内容と変遷を簡単に述べたい。

Ⅲ 「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」の内容

表1を最初から見ていくとき、「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」がさまざまなジャンルを大胆に横断し多彩な人たちをゲストに迎えていたことがうかがわれる。実際に1965年1月4日号の連載開始から「大宅壮一人物料理教室」をひもとくとき、次の3点に気づかされる。

第1には、社会や社会的出来事との強烈な結びつきである。たとえば、1965年2月1日号(第5回)では児玉誉士夫が登場している。この回は表紙にも「大宅壮一「人物料理教室」 昭和の怪物・児玉譽士夫」と記載されている(この連載が表紙に記載されているのは第1回と第5回のみ。ちなみに第1回の際の記載は、「新連載企画 大宅壮一の人物料理教室」)。7月26日号(第30回)では河野一郎逝去の夜に河野邸に電話をかけ中曽根康弘を呼び出し、対談をおこなっている。5月10日号(第19回)では政財界を巻き込んだ巨額の詐欺事件である吹原事件の渦中の田中角栄を招き、5月24日号(第21回)では容疑者の森脇将光を呼んだ。森脇はその夜に逮捕されている。

第2には、世界との結びつきである。これはとくにベトナム戦争に象徴される。3月15日号(第11回)では前月ベトナムで拉致された開高健を招き体験を聞いている。ベトナム関係については、6月14日号(第24回)の鈴木博彦、6月28日号(第26回)の南ベトナムから来た4人の若者、11月1日号(第44回)の大森実が挙げられる。

第3には、文化・芸能・スポーツへも幅広い目配りがなされていることである。たとえば4月5日号(第14回)では東京オリンピックの記録映画の監督・市川崑が委員会との見解の違いを述べている。5月17日号(第20回)では新作「赤ひげ」をひっさげた三船敏郎が、10月25日号(第43回)

²¹ 大宅と『文藝春秋』との結びつきについては、半藤一利も指摘するように、大宅は昭和30年代の『文藝春秋』の常連寄稿者であった(半藤一利「大宅壮一——無思想人の本領」毎日新聞社編『岩波書店と文藝春秋』『世界』『文藝春秋』に見る戦後思朝』毎日新聞社、1996年、157頁)。大宅は戦後昭和において同誌に98回寄稿している(「文藝春秋七十五年歴代執筆回数番付」『文藝春秋』1998年2月号)が、これは大宅が1970年に亡くなったことにかんがみても高い頻度であるといえる。それに対し、半藤も指摘するように大宅は『世界』にはいちども寄稿していない(半藤、前掲、157頁)。さらに表1に登場する大宅の対談相手は、いわゆる「岩波文化人」ではない(拙論を『文学』に寄稿した際の担当編集者・岡本潤氏、2009年9月10日、談話)。これらから1950年代60年代の論壇ジャーナリズムにおける大宅の位置を検討するにあたっては、「岩波書店と文藝春秋」と大宅との位置関係を検証する必要がある。これについては別稿に譲りたい。

ではやくざから映画俳優になり主演第1作目が公開中の安藤昇が登場している²²。

ところで表1をひととおり見ると、おおまかな傾向として、対談の終盤には比較的狭い領域(とくに財界)の話題の人物に移り変わっている模様を見ることができる。内容を見てみても、1970年のものは読者が関心を向けやすいと思われるような対象へと、扱う世界がこじんまりとしてきている。いわば当時のサラリーマンの読み物的なものに変質しているといえよう。そのほか、1970年9月14日号に登場した吉村昭、10月26日号に登場した瀬戸内晴美(瀬戸内はこの企画に2度登場している)は、翌週から連載が始まっており、その前宣伝的な色合いが濃い。これについては、1970年9月14日号から11月30日号までを担当した、最後の担当者である斎藤禎(現・日本経済新聞出版社代表取締役会長)にも確認をしたところ、そのような事例も当時あったという。

上記の「変質」のことを斎藤に述べたとき、斎藤は各界の第一人者といえる人たちに毎週毎週出してもらっているとこの時期には人間的に面白い人が払底してしまっていたのではないかという趣旨のことを語った²³。雑誌がつくられるプロセスのことを考えると、それが第一の理由になろう。

そのいっぽうで、対談のタイトルにセクシャリティにからんだものが一貫して見られる。たとえば「いまだから話そうお色気修行の秘伝 青春は“遊郭”で鍛えられたという吉行淳之介」と題

²² 第1回から第114回まで担当した鈴木經太郎によると、対談相手の人選は当時の編集長・榎原雅春がおこなっていたという。

なお、「新連載企画 大宅壮一『人物料理教室』 第一回山本富士子」を予告する誌面においても、「定評ある“人物鑑賞力”による対談を、さらに再構成した立体的な人物探訪」と記載されている(「一足先に正月をおとどけ致します ユニークな誌面構成でお目見得する…次号『週刊文春』1月4日特大号」『週刊文春』1964年12月28日号、123頁)が、鈴木に確認したところでも、対談の流れは記事の構成にあたり順番が変えられているという。

また鈴木によると、対談相手が大宅に対しインフォーマルな相談を持ちかけることもあり、それはオフレコ扱いになっている(鈴木經太郎、2009年8月24日)。オフレコということであれば、第168回(1968年4月15日号)に登場した文芸評論家の奥野健男は、大宅没後、生前の大宅との交流について次のように振り返っている。

いちばん印象に残るのは山崎某女の盗作事件の時の、週刊文春での対談であった。大宅さんは古今の盗作について、菊池寛はじめ国際的文学賞作家の代表作についてのあらゆる知識、情報を機関銃のように話された。その大半はオフレコとして週刊誌に載らなかったが、ぼくは文壇、ジャーナリズムの裏の真実に打ちのめされた感じであった(奥野健男「永遠の文学青年」ノンフィクション・クラブ大宅壮一追悼文集編纂会『追悼文集 大宅壮一と私』季龍社、1971年、324頁)。

²³ 斎藤禎、2009年8月21日。

された1965年8月23日号（第34回）では吉行淳之介が登場している²⁴が、遊郭の話など猥談に終始している。1970年1月26日号（第259回）では「夜の狩人」は悲しからずや 失神作家NO.1のホステス獲得術」と題し川上宗薫が登場している。

それ以外のものでも、大宅によって猥談が頻繁に語られている。たとえば岸信介との対談は次のように閉じられている。

大宅 はなしちがいますが、あなた、役人時代には、一番遊んだそうですね。

岸 ウン。局長のエンマ帖に、「性、遊興を好む」と書いてあった。当らずともいえども遠からずで……。

大宅 お宅も、そうとうの恐妻だというけれども……。

岸 いやあ……。

大宅 その軍律きびしい中を……。

岸 そのころの商工省は、いまの新橋演舞場の隣りで、環境がわるかった。

大宅 アイゼンハワーが、あなたのシンボルはえらくでかい、といったとか……。

岸 ウソですよ。どうも誤り伝えられてしまって、困る。

大宅 訪米したとき、お互いに見せあったんでしょう？

岸 いやいや。ゴルフからあがってシャワーを浴びてたんですよ。むこうの人は、前をかくさないんだな。

大宅 便所にも扉がない……。

岸 かくすと、異常があり、病気があるというふうに使われてる。それで、こっちもかくすわけにいかんもんだから……。

大宅 おおいに国威を輝かした。

岸 いや、非常に恥しい思いをした、といったんですよ。

大宅 毛唐は大きいですがね。それをうわまわるとは……。あなた、顔を見たところ、でかいことはでかそうだけれども……²⁵。

大宅壮一の対談に関する覚書 — 『週刊文春』連載「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」を中心に — (阪本博志)

今日において、首相を経験した大物政治家に対し評論家はその男性器の大きさについて話もちかけることは、考えにくい。それに対し大宅は平気なふうで岸に猥談を語り、それが何十万部も発行される週刊誌に掲載されている。ここでは象徴的なものを掲げたが、同様の事例は「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」で枚挙にいとまがない。

IV 「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」についての考察

それでは、「大宅壮一人物料理教室」「大宅対談」において変わらないところと変わったところに光をあてたときになにが見えてくるであろうか。

まず一貫して見られる大宅による猥談をどのようにとらえることができるだろうか。

大衆社会に向かう昭和30年代に大宅が「マスコミの帝王」と呼ばれるほど支持を集めた原因は、本稿の冒頭に紹介した彼の手による造語や比喩の巧みに帰せられることが多い。たとえば植田康夫は次のように解説している。

これまで日本の文化状況は、知識人と大衆の間に深い断絶があり、これを埋める努力は進歩的知識人とよばれる人たちによって、積極的に行なわれたとはいいがたい。そのため、知識人と大衆は結果としてお互いに不幸な反目をしてきた。

その状態が続いたのは、要するに、知識人の側から大衆に語る言葉をもたなかったからである。また、持とうと努力もしなかった。

その空洞を埋めたのが、実は大宅のアレゴリーであった。大宅は観念の異常連合という方法によって、知識人の世界の抽象的な問題を大衆に伝達しようとした。その結果が数々の流行語となった²⁶。

大宅がプライベートでも猥談を好んでいたことは評伝等でもよく紹介されているが、大宅が当時支持を集めたのは、造語や比喩以外にも、独特の文学性をもつともいえるレトリックをほどこした猥談にもよるのではないか²⁷。この点については稿を改めて検討したい。

次に雑誌から当時の社会を見るという観点に立つとき、内容の変容からどのようなことが言え

²⁴ 『アサヒ芸能』創刊1000号記念1965年9月26日特大号から始まった「吉行淳之介対談〈人間再発見〉」では第1回に大宅をゲストに迎えている。リード文のなかでは、次のように書かれている。「まず第1回のゲストは、言論界の雄・大宅壮一氏。実はこの大宅—吉行のご両人は過日、某誌上で大宅氏がホスト、吉行氏がゲストで顔を合わせている。が、今回はその席を交代してのリターン・マッチという次第である」。この「某誌」が『週刊文春』を指すことは言うまでもない。

²⁵ 「大宅対談」『週刊文春』1966年7月4日号、124頁。

²⁶ 植田康夫「大宅共栄圏の成立と崩壊」前掲『大宅壮一読本』、131頁（初出、1973年）。

²⁷ 「大宅の比喩にはしばしば人間のヘソから下の用語が登場する」理由について大隈が尋ねたところ大宅は、「ヘソから下には人間の本能の一つがひそんでいる。だれもが関心を持っている。だから、おれは意識的に使ってるんだ。ともかく、本能に訴えるものは強いからな」と答えたという（大隈秀夫『大宅壮一における人間の研究』山手書房、1977年、69、70頁）。

るのか、ここではさしあたっての仮説を述べておきたい。
 「大宅対談」とも时期的に重なる1967年から1970年まで『平凡パンチ』の編集長を務め同誌の黄金時代を築いた木滑良久は1990年室謙二に「木滑さんご自身は、60年代と70年代の間に、はっきりした切れ目を感じましたか？」と尋ねられ、次のように答えている。

感じましたね。70年代に入ると、もう、前と同じ繰り返ししかできなくなってきたな、と思った。それに、テレビで安田哲の攻防戦を見ている時も、なんとなく、これで時代が変わっていいかなと感じましたし。学生たちが逮捕されていたあとには、『パンチ』が散乱していたともいいすからね。

反対に、70年代から80年代へ、80年代から90年代へという切れ目は、あまり感じないんだけど。そのあたりになると、もう時代がだらだらと続いていくようにしか、感じなくなってきた(笑)²⁸。

1960年代と1970年代のあいだに切れ目を感じ、1970年代に入ってから「前と同じ繰り返し」だという木滑の認識を、強引に普遍化することはできない。しかしながら、小熊英二が1955年までを「第一の戦後」1970年までを「第二の戦後」と時期区分する²⁹ように、1960年代と高度成長期の終わった1970年代初頭の社会意識に生じた断層を、「大宅対談」の変容から読みとることはできないだろうか。そしてその境目に、大宅の他界を位置づけられないだろうか。

付記：本稿執筆にあたり調査にご協力をいただいた、糸川英穂氏(財団法人大宅壮一文庫専務理事)、上野徹氏、斎藤貞氏、鈴木經太郎氏の各氏(取材順)に御礼申し上げます。なお本稿は「覚書」という性格ゆえに、当時の担当編集者からうかがったお話の一部を紹介することとしました。今回記載しきれなかったものについては他日を期したい。なお引用した資料のなかに、今日では不適切な表現が含まれているが、引用の意図は差別的助長にあるのではないことを断わっておく。本稿は、平成20・21年度科学研究費補助金(若手研究B)、平成19-21年度宮崎学術振興財団助成金による研究成果の一部である。

²⁸ 木滑良久「華やかに煙って、まわりは星ばかりだった—『週刊平凡』『平凡パンチ』そして『an・an』へ—『思想の科学』1990年12月号、74頁。
²⁹ 小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、2002年。

表1 『週刊文春』連載「大宅壮一人物物理教室」 「大宅対談」一覧

回数	掲載号	氏名	肩書	メインタイトル	サブタイトル	頁数	単行本	全集	備考
第1回	1965年1月4日号	山本富士子		お富士さん子供を生みなさい	気のつよい美女、山本富士子を調理すれば…	32-37頁		○	
第2回	1965年1月11日号	奥村綱雄		太らすって、巻きあげて	陽気な忍術使い、野村証券会長・奥村綱雄	96-101頁			
第3回	1965年1月18日号	金田正一		“金田天皇”のマイ・ベース宣言	将来への夢から、女の語までいたい放題	32-37頁			
第4回	1965年1月25日号	川口松太郎		まだお若い直木賞最上級生	極道の人生流転を続けた川口松太郎の作家魂	32-37頁			
第5回	1965年2月1日号	児玉誉士夫		昭和の怪物児玉誉士夫の内幕	千万人にひとりという影の実力者を解剖する	32-37頁		○	
第6回	1965年2月8日号	渋谷のり子		愛されるより愛するのが好き	うたと恋に生きた渋谷のり子の純情忍法	32-37頁	○	○	
第7回	1965年2月15日号	武藤緑治		書生っぽ社長が進軍ラッパ	カネボウを率いるワンマン武藤緑治の人間経営学	32-37頁			
第8回	1965年2月22日号	宇都宮徳馬		アジアをかける自民党の一匹狼	“代議士なんて、いつでもやめる”宇都宮徳馬の反骨	32-37頁		○	
第9回	1965年3月1日号	石井好子		怪物おいちちゃんと孫娘	久原房之助に可愛がられた孫娘・石井好子の根性	32-37頁			
第10回	1965年3月8日号	佐藤和郎		資産10億で眠れない男一匹	株と女と富士山に賭けた男・佐藤和郎の事業観	32-37頁			
第11回	1965年3月15日号	開高 健		ベトナム戦線から生きて帰る	作家・開高健が身をもって体験した“戦争”の実態	32-37頁			
第12回	1965年3月22日号	ミヤコ蝶々		離婚で有名になったらアキマヘン	色気はやめて芸道一筋、“夫婦善哉”10年選手のミヤコ蝶々	100-105頁			
第13回	1965年3月29日号	福田恆存		福田恆存流ケンカのすずめ	論争をたのしむ江戸っ子評論家の手口を分解すれば…	32-37頁			
第14回	1965年4月5日号	市川崑		“国辱”映画の汚名をあびて	「ボクは五輪映画の犠牲者だ」と叫ぶ総監督・市川崑の胸の中	32-37頁			
第15回	1965年4月12日号	瀬戸内晴美		男が好きだから書くのです	おしゃれな阿波女・瀬戸内晴美の底抜けお色気ばなし	32-37頁	○		
第16回	1965年4月19日号	正力松太郎		世界が一番好きな大風呂敷の中身	勝負に一度も負けたことがないという正力松太郎の事業欲	32-37頁			
第17回	1965年4月26日号	神山茂夫		除名の勲章をぶらさげた反逆児	代々木の“赤い館”にかみつく神山茂夫の闘魂	104-109頁			
第18回	1965年5月3日号	森光子		体当り女優男性放浪のすべて	芸に生きた生きた森光子の愛の履歴書	32-37頁			
第19回	1965年5月10日号	田中角栄		浪花節で役人を辞せる“三助”大臣	越後の働き者と自任する大蔵大臣・田中角栄	96-101頁		○	
第20回	1965年5月17日号	三船敏郎		せまい日本映画界には住みあきた	低俗な映画界に斬り込む一匹侍・三船敏郎の気合	32-37頁		○	
第21回	1965年5月24日号	森脇将光		吹原事件のカギを握る怪物	奇怪なドラマの内幕を逮捕直前に公開した、森脇将光	96-101頁			
第22回	1965年5月31日号	大山康晴		吹いても飛ばない大山将棋の極意	わが敵は“勝ちに飽きること”と自負する、大山康晴の胸中	92-97頁		○	
第23回	1965年6月7日号	平林たい子		政治家なんてみんなバケモノよ	汚れた政界の内幕を斬る、“オンナ一匹狼”平林たい子	92-96頁			
第24回	1965年6月14日号	鈴木博彦		ベトコンの捕虜になった25日間	知られざるベトコンの内部と抑留生活を語る緊急対談	38-42頁			
第25回	1965年6月21日号	臼井吉見		ニセモノ文化人はいおいてわかる	大衆を愚弄するものは誰か？臼井吉見のズバリ真偽鑑別法	104-108頁			
第26回	1965年6月28日号	グエン・ビンドック		戦火のベトナムからきた四人の闘士	二十年間の泥沼戦争の実情を訴える政府役人、将校、看護婦、学生	32-37頁			
		マイ・チミン							
		チャン・パンラム							
		グエン・カオタン							
題27回	1965年7月5日号	鶴岡一人		監督商売の内幕を斬る鶴岡親分	独創する南海の立役者が、初公開する球界商法の秘密	38-42頁			
題28回	1965年7月12日号	佐藤賢了		ベトナムを第二の満洲にするな!	「日本軍と同じ失敗を繰返すな」と叫ぶ佐藤賢了	38-42頁			
題29回	1965年7月19日号	杉村春子		中共から帰ってきた新劇の“女帝”	訪中歌劇団の副団長・杉村春子の見た中共の素顔	100-104頁			
題30回	1965年7月26日号	中曾根康弘		死の前夜河野“総理”はかく語った	われもし首相なりせば…実力者最後の発言を伝える中曾根康弘	38-42頁			
題31回	1965年8月2日号	小川栄一		日本の大ラッパを吹く“観光の鬼”	観光日本を買い占めて世界征服をめざす男・小川栄一	92-96頁		○	
題32回	1965年8月9日号	渋谷天外		わたのホンマの喜劇は恐妻だす	舞台生活五十年、女極道四十年の喜劇役者・渋谷天外の楽屋裏	92-97頁			
題33回	1965年8月16日号	近藤荒樹		日本に“恐慌の嵐”がやってくる	現状のままでは国ぐるみ倒産すると警告する金融王・近藤荒樹	110-114頁			
題34回	1965年8月23日号	吉行淳之介		いまだから話そうお色気修行の秘伝	青春は“遊廓”で鍛えられたという吉行淳之介	92-97頁	○	○	
題35回	1965年8月30日号	加藤俊一		私が見た日本降伏の決定的瞬間	ミズリー艦上から20年、日本外交の舞台裏を語る加藤俊一	92-97頁			
題36回	1965年9月6日号	中山恒明		ガンで死なない方法教えます	“一億総ガン・ノイローゼ”を吹き飛ばす世界的名医・中山恒明	92-97頁		○	
題37回	1965年9月13日号	石田博英		保守党はこの二年で生まれ変わる	政界批判から女性観まで—自民党一匹狼・石田博英の告白	96-100頁			
題38回	1965年9月20日号	石垣純二		亭主族に告ぐ“夜の女房管理法”	性氾濫時代に生き抜く法と、女房長生きの秘訣を説く石垣純二	108-112頁	○		
題39回	1965年9月27日号	今日出海		デモ弾圧下にある韓国の素顔	衛戍令がかかっている現地の内幕を語る今日出海の視察報告記	96-100頁			
題40回	1965年10月4日号	山中宏		損をしないこれからの株の買い方	上昇相場は本ものか？政界の理論派山中宏がみた景気診断	96-101頁			
題41回	1965年10月11日号	伊藤整		“花の女流作家”の素顔とモデル小説	囁くの中に生きた女流作家たちの生態を解剖する伊藤整	104-108頁			

Table with 10 columns: 回数 (Issue), 掲載号 (Issue No), 氏名 (Name), 肩書 (Title), メインタイトル (Main Title), サブタイトル (Subtitle), 頁数 (Pages), 単行本 (Monograph), 全集 (Complete Works), 備考 (Remarks). Rows 1-86 cover dates from 1965 to 1966.

Table with 10 columns: 回数 (Issue), 掲載号 (Issue No), 氏名 (Name), 肩書 (Title), メインタイトル (Main Title), サブタイトル (Subtitle), 頁数 (Pages), 単行本 (Monograph), 全集 (Complete Works), 備考 (Remarks). Rows 87-130 cover dates from 1966 to 1967.

Table with 10 columns: 回数, 掲載号, 氏名, 肩書, メインタイトル, サブタイトル, 頁数, 単行本, 全集, 備考. Contains entries from 第221回 to 第265回.

Table with 10 columns: 回数, 掲載号, 氏名, 肩書, メインタイトル, サブタイトル, 頁数, 単行本, 全集, 備考. Contains entries from 第266回 to 第303回.

氏名の表記は誌面にもとづく。また肩書は誌面において氏名に添えられた見出しに記載されているものによる。なお「単行本」欄は『大宅壮一人物理解 stamina編』再録の有無を、「全集」欄は『大宅壮一全集第15巻』再録の有無を示している。

表2 『週刊公論』連載「虚頭対談」一覧

回数	掲載号	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	タイトル	頁数
第1回	1959年11月24日号	大宅壮一	フランキー堺 (俳優)					私は会社になりたい	8-11頁
第2回	1959年12月1日号	大宅壮一	フランキー堺 (俳優)					若い世代のガクワリズム	8-11頁
第3回	1959年12月8日号	大宅壮一	フランキー堺 (俳優)					坊主まるもうけ	8-11頁
第4回	1959年12月15日号	大宅壮一	今東光 (作家)					東光易断 女を占う	8-11頁
第5回	1959年12月22日号	大宅壮一	河野一郎 (衆議院議員・自民党)					日本のフルシチョフ	8-11頁
第6回	1959年12月29日号	大宅壮一	平林たい子 (作家)	細川隆元 (評論家)				一九五九年の十大愚挙	8-13頁
第7回	1960年1月5日号	大宅壮一	大川博 (東映社長)	正力松太郎 (NTV会長)				一テレビプロ三映画	10-13頁
第8回	1960年1月19日号	大宅壮一	淡谷のり子 (歌手)	今東光 (作家)				男の正しい穿き方、脱ぎ方	10-13頁
第9回	1960年1月26日号	大宅壮一	阿部真之助 (元朝日新聞主筆)	小汀利得 (元日本経済新聞社長)	御手洗辰雄 (元東京新聞主筆)			新聞を叱る	28-31頁
第10回	1960年2月2日号	大宅壮一	三木武夫 (自由民主党顧問)	水野成夫 (産経新聞社長)				国際政治のセールスマン	28-31頁
第11回	1960年2月9日号	大宅壮一	中沢不二雄 (バ・リーグ会長)	鈴木竜二 (セ・リーグ会長)				輝かしくスロープ・リーグ	26-29頁
第12回	1960年2月16日号		平林たい子	宇野千代	円地文子			世界最高井戸端会議	26-29頁
第13回	1960年2月23日号		三島由紀夫 (作家)	永田雅一 (大映社長)				浪費王とニューフェイス	28-31頁
第14回	1960年3月1日号		淡島千景 (女優)	今東光 (作家)	森重久彌 (俳優)			こりゃ、ほんまもんや	30-33頁
第15回	1960年3月8日号		小畑英介 (浜田病院副院長)	三谷茂 (日赤本部産院副院長)	中島精 (慶応病院婦人科部長)			トップ・ベビー誕生	6-10頁
第16回	1960年3月15日号		阿部冬彦	杉浦幸雄	横山泰三			アイ・ラヴ・シンスケ	30-33頁
第17回	1960年3月22日号		尾崎士郎 (作家・横綱審議会委員)	阿部真之介 (評論家・横綱審議会委員)	辰野隆 (仏文学者・横綱審議会委員)			土俵上の“人生劇場”	54-57頁
第18回	1960年3月29日号		今東光 (作家)	西尾末広 (民主党党首)				『鬼ガ島』から西尾構想	54-57頁
第19回	1960年4月5日号		細川隆元 (政治評論家)	小汀利得 (経済評論家)	矢次一夫 (政治評論家)	御手洗辰雄 (政治評論家)		政界「猿ガ島」	58-62頁
第20回	1960年4月12日号		遠藤周作 (作家)	福田蘭重 (邦楽家)	高木健夫 (評論家)			ホラ吹き乗合船	34-37頁
第21回	1960年4月19日号		武見太郎 (日本医師会会長)	徳川夢声 (声優)				イモ医者時代	30-33頁
第22回	1960年4月26日号		浅沼稲次郎 (社会党委員長)	阿部真之介 (評論家)				マァ、マァ、『三井三池』	38-39頁
第23回	1960年5月3日号		今東光 (作家)	御木徳近 (PL教団教主)				人生を芸術にする男	58-61頁
第24回	1960年5月10日号		菅原通済 (麻薬対策推進委員会会長)	阿部真之介 (評論家)				麻薬の13階段	58-61頁
第25回	1960年5月17日号		小林洋子 (デザイナー)	徳川夢声 (声優)	大関早苗 (東京チャームスクール校長)			チャーム採集旅行	58-61頁
第26回	1960年5月24日号		松下幸之助 (松下電器社長)	朝山新一 (大阪市大教授)				日曜、金、セックス2倍論	58-61頁
第27回	1960年5月31日号		北杜夫 (作家)	藤島茂 (国鉄職員)				トイレット立国論	58-61頁
第28回	1960年6月7日号		阿部真之助 (評論家)	中里恒子 (作家)	平林たい子 (作家)			『ヤボな女』の幸福	58-61頁
第29回	1960年6月14日号		奥野信太郎 (慶応大学教授)	池田弥三郎 (慶応大学助教授)				『幽霊』の品定め	56-59頁
第30回	1960年6月21日号	大宅壮一	藤原弘達 (明大教授)					民主主義の勤務評定	56-59頁
第31回	1960年6月28日号	大宅壮一	堀江薫雄 (東京銀行頭取)					“その日グラシー” 日本	56-59頁
第32回	1960年7月5日号	大宅壮一	猪木正道 (京都大学教授)					“総理大臣” 養成所設立案	56-59頁
第33回	1960年7月12日号	大宅壮一	堤清二 (西武百貨店社長)					“元全学連” のデパート経営法	56-59頁
第34回	1960年7月19日号	大宅壮一	藤山愛一郎 (外務大臣)					酋長部落にハンカチをふる	56-59頁
第35回	1960年7月26日号	大宅壮一	邱永漢 (作家)					『損得史観』 夏季大学	56-59頁
第36回	1960年8月2日号	大宅壮一	御手洗辰雄 (評論家)	唐島基智三 (評論家)				隼人内閣誕生	56-59頁
第37回	1960年8月9日号	大宅壮一	中山伊知郎 (中労委公益委員)					三池タイトル・マッチを預かる	60-63頁
第38回	1960年8月16日号	大宅壮一	江崎真澄 (防衛庁長官)					三階級特進長官	58-62頁
第39回	1960年8月23日号	大宅壮一	太田薫 (総評議長)					株式会社「総評」の一等社長	58-62頁
第40回	1960年8月30日号	大宅壮一	永井道雄 (東京工大助教授)					総合ビタミン国家	58-62頁
第41回	1960年9月6日号	大宅壮一	小川栄一 (東海汽船社長国際観光会館取締役)					「こずり産業」 振興策	58-62頁
第42回	1960年9月13日号	大宅壮一	森下泰 (森下仁丹社長)					良薬は口に甘し	58-62頁
第43回	1960年9月20日号	大宅壮一	荒木万寿夫 (文部大臣)					荒木一刀流秘伝	58-62頁
第44回	1960年9月27日号	大宅壮一	鹿内信隆 (ニッポン放送専務)					東京オリンピックの演出法	58-62頁

第45回	1960年10月4日号	大宅壮一	司馬遼太郎 (作家)					「大阪侍」 売り出す	58-62頁
第46回	1960年10月11日号	大宅壮一	石田博英 (労働大臣)					全権政治からジャンケン政治へ	58-62頁
第47回	1960年10月18日号	大宅壮一	丸尾長顕 (舞台演出家)					実務知識うらばなし	58-62頁
第48回	1960年10月25日号	大宅壮一	三原脩 (大洋ホエールズ監督)					人生野球の三原作戦	54-58頁
第49回	1960年11月1日号	大宅壮一	阿部真之助 (NHK会長)					NHKのべらんめえ会長	56-60頁
第50回	1960年11月8日号	大宅壮一	宮城音弥 (東京工大教授・心理学者)					僕も私も「近道反応」	56-60頁
第51回	1960年11月15日号	大宅壮一	横田喜三郎 (最高裁長官)					雑音の親玉	58-62頁
第52回	1960年11月22日号	大宅壮一	吉田秀雄 (電通社長)					“広告の鬼” 大いに笑う	58-62頁
第53回	1960年11月29日号	大宅壮一	阪本勝 (兵庫県知事)					文化知事の寝物語	58-62頁
第54回	1960年12月6日号	大宅壮一	藤原弘達 (明大教授)					評論家不信任時代	86-90頁
第55回	1960年12月13日号	大宅壮一	川辺るみ子 (バー・エスボール経営者)					十五年目の浮気	86-90頁
第56回	1960年12月20日号	大宅壮一	有吉佐和子 (作家)					男の旅行、女の旅行	86-90頁
第57回	1960年12月27日号	大宅壮一	柳家金語楼 (喜劇俳優)					虚頭(さんごろう)のすす払い	86-90頁
第58回	1961年1月2日号	大宅壮一	谷崎潤一郎 (作家)					文豪と舌豪	114-118頁
第59回	1961年1月9日・16日合併号	大宅壮一	源氏鶏太 (作家)					サラリーマンの神様	130-134頁
第60回	1961年1月23日号	大宅壮一	蘆原英了 (音楽評論家)					1961年度(セックスティ・ファースト) 享楽輸出倍増案	86-90頁
第61回	1961年1月30日号	大宅壮一	市川崑 (映画監督)					更年期を迎えた映画界	86-90頁
第62回	1961年2月6日号	大宅壮一	謝国権 (医学博士)					男性クッキング教室	86-90頁
第63回	1961年2月13日号	大宅壮一	三島由紀夫 (作家)					外からみた日本	86-90頁
第64回	1961年2月20日号	大宅壮一	高崎達之助 (大日本水産会会長)					おじいさん放浪記	86-90頁
第65回	1961年2月27日号	大宅壮一	今東光 (作家)	寺内大吉 (作家)				新版・坊主めくり	86-90頁
第66回	1961年3月6日号	大宅壮一	菊田一夫 (東宝演劇担当重役・劇作家)					歌舞伎の体質改善	102-106頁
第67回	1961年3月13日号	大宅壮一	藤原あき (秋子経営者)					女のカンと「亭主の秘密」	86-90頁
第68回	1961年3月20日号	大宅壮一	川又克二 (日産自動車社長)					車用族からの脱出	86-90頁
第69回	1961年3月27日号	大宅壮一	太田恵子 (クラブ・おおたマダム)					夜の「商会議所」	86-90頁
第70回	1961年4月3日号	大宅壮一	滝田実 (全労議長)					アメリカのくしゃみと日本	88-92頁
第71回	1961年4月10日号	大宅壮一	原文兵衛 (警視総監)					警視総監、大いに苦笑いす	100-104頁
第72回	1961年4月17日号	大宅壮一	A・バルジャン (全ソ・サーカス連盟総裁)					「芸術」という名の紐つきサーカス	90-94頁
第73回	1961年4月24日号	大宅壮一	岸道三 (日本道路公団総裁)					「ゴネ得」にっぽん	90-94頁
第74回	1961年5月1日号	大宅壮一	牛山善政 (ヤシカ株式会社社長)					写真も「インスタント」時代	90-94頁
第75回	1961年5月8日号	大宅壮一	江田三郎 (日本社会党書記長)					「幸せ」を売る社会党	90-94頁
第76回	1961年5月15日号	大宅壮一	小田実	高橋雄次				衣食足ってオンナを知る	88-92頁

氏名の表記は誌面にもとづく。また肩書は誌面において氏名に添えられた見出しに記載されているものによる。

表3 『改造』連載「愉しき毒舌」一覧

回数	掲載号	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	頁数
第1回	1953年4月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	「江斬り」罷り通る	158-167頁
第2回	1953年5月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	斬り捨て御免!	182-192頁
第3回	1953年6月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	勝負あった!	150-160頁
第4回	1953年7月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	世相を撫で斬る	172-183頁
第5回	1953年8月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	真夜中の清舌	188-177頁
第6回	1953年9月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	政災日本に蔓延す	166-169頁
第7回	1953年10月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	滑稽にっぼん	188-169頁
第8回	1953年11月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	その真相は?	194-204頁
最終回	1953年12月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	告別の辞!	182-192頁
政界版	1954年4月号	大宅社一	阿部眞之助	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	犯人を逃がすな!	156-167頁
政界版	1954年5月号	大宅社一	阿部眞之助	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	日本郵送行進曲	100-111頁
政界版	1954年6月号	大宅社一	阿部眞之助	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	岩淵辰雄	頑張れ、汚職の闇!	120-131頁
第10回	1954年7月号	大宅社一	中野好夫	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	白井吉見	光は西方より	118-129頁

氏名の表記は誌面にもとづく。

表4 『企業の新街道を行く』対談一覧

氏名	肩書	タイトル
赤坂武	日本銅管株式会社社長	世界に進出する“鉄のパイプ”
安西浩	東京瓦斯株式会社副社長	エネルギー革命のバイオニア
飯田新一	株式会社高島屋社長	老舗デパートに吹きこむ近代性
石川六郎	鹿島建設株式会社副社長	国づくりのワールド・チャンピオン
石田退三	トヨタ自動車工業株式会社社長	世界のハイウエーを走破する
稲山嘉寛	八幡製鉄株式会社社長	鉄一筋に三十五年
上野次郎男	積水化学工業株式会社社長	世界の化学工業をリードする
上野十蔵	中外製薬株式会社社長	アイデアが生んだ世界の保健薬
越後正一	伊藤忠商事株式会社社長	ネットワークで築いた総合商社
小川栄一	藤田観光株式会社社長	日本を縦断する観光計画
大原総一郎	倉敷レイヨン株式会社社長	繊維産業の伸で光る国産技術
奥村綱雄	野村證券株式会社社長	生きぬいた証券四十年
川崎千春	京成電鉄株式会社社長	大車輪で築く新観光ルート
川村勝巳	大日本インキ化学工業株式会社社長	印刷文化を塗りかえるカラー・メーカー
木川田一隆	東京電力株式会社社長	堅実一路の電力経営
北沢敬二郎	株式会社大丸会長	デパート界の王座を守る伝統商法
北島織衛	大日本印刷株式会社社長	暮らしを彩る印刷界の王者
進藤孝二	大阪商船三井船舶株式会社社長	七つの海をむすぶ海運界の勇者
田代茂樹	東洋レーヨン株式会社社長	合成繊維時代の旗手
玉置明善	千代田化工建設株式会社社長	化学工業建設のプロデューサー
堤清二	株式会社西部百貨店店長	デパート界の若き獅子
土光敏夫	石川島播磨重工業株式会社社長	躍進をつづける重工業の覇者
西山彌太郎	川崎製鉄株式会社社長	“鉄の時代”を推進する十五年計画
平木信二	リッカーマシン株式会社社長	女性ひとりにミシン一台を
平塚常次郎	日魯漁業株式会社社長	国際信用でつらぬくサケ・マス漁業
福島敏行	日本通運株式会社社長	日本全土を走る“黄色の大動脈”
高鍋八千代	株式会社後楽園スタヂアム社長	一千万人の娯楽の殿堂
松尾静麿	日本航空株式会社社長	世界の空にはばたく日本のつばさ
松下幸之助	松下電器産業株式会社社長	世界のナショナルを築いた原動力
水上達三	三井物産株式会社社長	新輸出増論
茂木啓三郎	キッコーマン醤油株式会社社長	醤油づくり三百年の伝統
百瀬結	日本ビクター株式会社社長	大衆を魅惑する音響メーカー
山下太郎	アラビア石油株式会社社長	独創が開発した油田王国
山本為三郎	朝日麦酒株式会社社長	ほろにがの味をつくって半世紀